

## 保育計画成果報告書

法人名	株式会社 アンミッコ
施設名	春アンミッコ保育園
報告者（役職）	小倉ひかり（施設長）
住所・連絡先	東京都練馬区春日町3-31-42
	☎ 03-5848-3905
	E-mail hikari@ammicco.co.jp

○タイトル（保育計画）

親子の絆、子どもの心を育む『絵本の森』

○主な助成備品

L字本棚、絵本、観葉植物、装飾用小物、絵本立て

### 1. 実施した保育計画策定の目的

平成24年4月、当園が開園を迎えた。辛うじてウワモノと保育に必要な最低限度のもの揃っているものの“なくても何とかなる”でも“あったほうがいい”ものは殆どと買っていいほどないないづくしでのスタートとなった。

子どもの育ちにとっても絵本は不可欠なのは周知である。開園当初は職員が持ち寄ったり、某リサイクル書店やフリーマーケットで揃え、1年目途中で区立図書館で処分する絵本や紙芝居を頂いた。それを6クラスに分ける。絵本は各クラスの棚に充分に収納できる程度の量だったが、子ども達は日に何度も手に取り、保育者はそこから子ども達へ読み聞かせの絵本を選んだ。

絵本は子どもの育ちにとっても大事な要素がいっぱいだ。もっともっとたくさんの絵本にふれさせてあげたい…職員みんなの思いだった。

保育園の子ども達は幼稚園と違い、保育時間が長い。当園でも長い子どもでは、保育園に毎日11時間以上いる。保護者が保育園に迎えに来た時は、大人もさることながら子どもだって疲れているのである。保育園の玄関を出る時から、子どもの我がママが始まる。大きくなったのに抱っこをせがみ、ママ、ママ、とうるさくつきまとう。子どもは長時間頑張っている、甘えたい、それを理解して欲しいという気持ちの表れである。しかし、親も疲れているところにこの状態ではイライラが増す…という誠に悪循環な毎日が保育園で繰り返されていた。これでは、せっかく頑張ってママを待っていた子どもも、一生懸命仕事をして迎えに来た親もうかばれない。負のスパイラルの始まりだ。

子どもだって、お腹がすいている。早く帰って晩ご飯を食べたいだろう。そのためにママが忙しく夕食を作らなきゃいけないのはわかっている。そのあとは保育園からも持ち帰った汚れた衣類を洗濯しなきゃいけない、お風呂の準備もしなきゃいけない…ママは忙しい、頑張っている…そんなこと、子どもも百も承知なのだ。グズグズ言っただけではいけない、怒られる、ママを困らせる…子どもだってわかっている。でも…。

何か策はないだろうか…。考えたのが絵本だった。5分でいい、1冊でいい、ママが子どもを膝にのせ、ゆったりと読み聞かせをする時間と場所を作れば、そこで子どもは母の温もりを感じ、安心し、嫌なことをちょっぴり忘れられ、疲れが少し癒されるのではないか。ほんのわずかな時間でも、そうすることでママも子どもも、心に少しの余裕が芽生え、ニコニコ笑顔で園を後にすることができればどんなにいいだろうか。

絵本がもっとあれば…。絵本の世界は心を育み、そして絵本が親と子を繋ぎ、温かな絆を育む。保育園からそういう環境と時間を提供することの大切さ、必要性を強く感じた。

## 2. 具体的な実施内容

園の玄関をくぐると、ほんの小さな、ホールのようなスペースがある。1階は0、1歳児の保育室、2階には2歳児以上の保育室があり、このホールの横に階段が設けられている。即ち、誰もが目に入るスペースだ。ちょうど壁側には何も置いていなかったの、ここに本棚を作るとちょうどいいだろう！と計画を進めた。長く使うものなので、妥協はせず、スペースにきっちりと収まり、子どもの手が届き、いつでも本が身近に感じられるような、こだわりの詰まったオリジナルの本棚を業者と何度も何度もやりとりをして作って頂いた。小さい本と大きい本が上手く収納できるように段を設定し、紙芝居は奥行のある棚に収納できるようにする。また、子どもが自ら読みたい！と思えるように絵本のディスプレイが出来るよう、最上段に工夫を凝らしてみた。絵本をディスプレイすることで、目から興味を持ってくれたらいいな、との思いと、季節感、行事を自然に感じてほしいという思いがあった。よって、ディスプレイの絵本はちょくちょく変えている。春には、春っぽい絵本や春の花や虫の図鑑、新年度すぐの行事の遠足の前には、遠足やピクニックなどのお話の絵本が目に入る環境を作った。



【春の絵本が見えるところに並ぶ。この日の給食はお魚なので“さかな”の本も！】

また、“親子でホッできるスペース”を提供したかったので、タイトルのとおり『絵本の森』にしたいと考えた。森、というほどの広さではないが、無機質に本が本棚に収まるスペースではなく、そこに温かい空気が流れるような雰囲気作りを目指したかった。森のイメージに合うように、本棚のコーナーに少し背の高い観葉植物を置いた。子どもが楽しくなるように、小物も飾り、森のイメージを膨らませることにした。

絵本棚がオーダーだったこともあり、実際に園に納められたのが初夏であった。子ども達は「わ～スゴイ！」「絵本たくさんで嬉しいね」「卒園までに全部読めるかなあ」と約500冊の絵本と紙芝居を前に子ども達の目は輝いていた。



【紙芝居の世界へようこそ…1歳児】

【春の絵本が見えるところに並ぶ。この日の給食はお魚なので“さかな”の本も！】



【絵本の読み聞かせの時間…3歳児】

【春の絵本が見えるところに並ぶ。この日の給食はお魚なので“さかな”の本も！】

### 3. その成果と評価

「子ども達が絵本に触れる時間が増えた」「子どもがいつも絵本に囲まれた環境がある」「行事や季節の絵本があることで子ども達の興味が広がった」主な職員の声である。

絵本棚の上に、ディスプレイできるような作りにしたので、そこには季節の絵本や行事、子ども達に伝えたい内容などの絵本を並べている。また、園内のそこここのスペースにも季節にちなんだ絵本を飾っている。



【3月のひなまつり、そして卒園式が近いこともあって『みんなともだち』の絵本】

夏のある日のこと。私たちの園は裸足で遊べる園庭があり、あえて遊具を置かず、子どもが主体的に遊びを作り上げて欲しいと思っている。陽気がよくなると、泥んこ遊びが始まる。「“どろんこハリー”とおんなじだね」とある子どもが嬉しそうに言った。どろんこハリーは、この時期を前に飾ってあった本だ。また、秋の運動会前には、運動会やかけっこにちなんだ絵本を飾っておいた。“よーいどん”という絵本は、まさにかっこの、“よーい”の場面が表紙だ。子ども達は、「よーい、どんって言ったら走るんだよ」「思いっきり走るんだよ」「うんどうかいはフレーフレーっておうえんするんだよ！」と口々に絵本のシーンを思い出したかのように盛り上がっていた。運動会とは、と話をせずとも、絵本を

読むことでイメージがわいたり、楽しみにしたり、自分達も運動会に出るんだ！という気持ちになったり、と期待に胸弾ませていた。絵本はとても自然に子どもの心に飛び込むのだ。絵本を読まずとも、保育園の絵本棚に飾った“よーいどん”を見ているだけで運動会が楽しみになる、絵本効果だ。

絵本は読み聞かせのほか、自分の好きな本を選んでそれぞれが読む場面もある。また、大きいクラスでは絵本コーナーで思い思いの絵本を選んで自分達のお部屋に持ち帰って読む時間も設けている。そこは図書館のような静けさだ。子ども達は絵本に引き込まれているのか、その顔は真剣だったり、楽しいお話を読んでいるのか、笑顔で読み進める子どももいる。大人の読み聞かせも必要だが、自分の興味関心のある絵本を読む、或いは見る、という時間、経験もまた子どもにとっては大切な時間なのである。



【もうすぐ卒園の5歳児。自分の好きな絵本、気に入った絵本を選び静かに読む。】

夕方のお迎えの時間。こちらの想像以上に、お迎え時に親子で絵本コーナーを利用している。毎日、お決まりのコースになっている親子もいれば、たまにだったり、週のうち何度か、という親子もいる。ママは一刻も早く帰りたいであろう、子どもに促されて嫌々本を読んでいるのでは…と当初、心配したが、全くそんなことはなかった。保育園の中で、むしろその場所だけが異空間のような、親子のとても素敵な光景がそこにあった。ママの眼差しはとても優しい。子どもは本当に満足している安堵の表情だ。夕方、数組の親子がそこにいる。1日で最もゆっくりと時間が流れている時かもしれない。フローリングが床暖房になっていることも手伝って、身も心も温かく、見ている方も心がホッとする。

保護者の声、感想を伺った。

「絵本コーナーで一息つくことで、自分もワーキングウーマンから母へ切り替えができる」

「家に帰ると、家事に追われて子どもと関われない。絵本コーナーで子どもに本を読んであげることが1日の中で唯一、子どもと向き合える時間になっている。」

「図書館にわざわざ行くのは億劫だし、広すぎて親子で疲れてしまう。その点、保育園はゆっくり好きな本を読めるちょうどいい空間がある。」

「ここで本を読んであげる時間が、自分を母親らしく思える時間」

「“絵本は〇冊、〇時までね”と決めているので、子どもにとっては充分ではないはずなのに、家に帰ってから、ちゃんと一人遊びをして食事を待っていてくれて助かる」  
嬉しい声がたくさん集まった。



【お迎えに来られたママとのひととき。そこには温かな空気が流れています。】

#### 4. 今後の課題と展望

「出した本はあったところにしましましょう」と子ども達に声をかけている。恐らく、保護者の方々もそう意識して下さっている、とは思いますが、現状はなかなかそうはいかない。こじんまりとしたスペースで、出来るだけ家庭的な雰囲気を作りたかったこともあり、図書館等でよく見かけるような背にラベルを貼ったり、本棚に分類を促すような記載は何もしていない。一応、幼児向け、乳児向け、大きい本、小さい本、シリーズ等で分類し整理をして収めてあるが、一見するとどこから取ったかわからなくなってしまう、或いはルールが徹底しておらず適当なところになってしまう、ということになってしまう。現状では、季節や行事毎でディスプレイする絵本を選別する際、併せて整理しているが、出来ることなら、保護者も巻き込んで、子ども達中心に整理を心がけたいと考えている。手始めに、5歳児の当番活動の一つに「本棚整理」を入れてみた。保育室内の本棚なので、冊数にしてみればさほどでもないかもしれないが、1年、観察していると今では見事に整理が出来ている。当番の子ども達でシリーズ別、大きさ別にきちんと気持ちよく収めている。勿論、5歳児ともなると、そういう力もついてくるのだろうが、それよりも当番を経験することで、子どももあった場所に戻す習慣がついたのである。これを、何とか園の本棚の整理に繋げないかと考えている。



【保育室内の絵本の整理をする5歳児】

また、帰りに絵本コーナーに立ち寄る親子は多いが、顔ぶれは決まっているように思う。1年で固定化してしまったかもしれない。相変わらず、子どもがグズグズギャングン大騒ぎをして引っ張られるように園を後にする親子もいる。そんな時、ちょっと絵本コーナーに寄って下さる時間はなかったのかな、と残念に思う。出来るだけ多くの方に利用して頂き、素敵な時間を過ごせる新たな親子が誕生すると嬉しく思う。

これからも子どものために、そして保護者サポートのために、絵本コーナーを喜んで頂けるものになるよう目指したい。

以上